

## 狩野山雪筆「蘭亭曲水図屏風」について

ほそかわ あすか

細川 明日香 (外務省外交史料館)

## 発表要旨

10  
時  
|  
10  
時  
40  
分

松ヶ崎・西キャンパス内センターホール

江戸時代初期に京都で活躍した画師・狩野山雪筆「蘭亭曲水図屏風」(以下、随心院本)は、その幾何学的構図や明代の「蘭亭図巻」(万暦20年[1592]、以下、万暦本)の図像を参考にしている点が注目されてきた。そして近年では、京狩野家とその庇護者であった九条家の研究、随心院本に先行する山雪筆の「蘭亭曲水図(東本願寺下絵)」の写真資料の再発見など、随心院本の研究は急速に深化している。本発表は、これら先行研究に学びつつ、随心院本、東本願寺下絵、狩野山楽筆・石川丈山賛とされる「蘭亭曲水図」(以下、潁川美術館本)および万暦本の詳細な比較を行い、随心院本の特徴とその位置を明らかにすることを目的とする。

図様の比較からは、万暦本や東本願寺下絵との差異として、第一隻での林や露台の追加、滝の縮小、第四隻での、橋の方向の変更や門の追加が挙げられよう。「曲水宴図」全般における図像研究をされた亀田和子氏は、随心院本第四隻の橋と門が狩野山楽筆「南蛮屏風」(以下、サントリー美術館本)左隻からのモチーフ引用であることを説かれているが、第一隻での追加・変更もまたサントリー本「南蛮屏風」からの引用として考えることが出来よう。では何故山雪は随心院本に狩野山楽の「南蛮屏風」を引用したのであろうか。発表者はそこに横巻から屏風への転換という形態的理由と憧れの地という意味的理由があったことを明らかにする。

また、先行する東本願寺下絵では、万暦本に忠実に基づいているが、随心院本では人物の姿を描く際に、狩野派粉本や中国の版本の図様を利用していることも明らかとなった。ところで、日本における「蘭亭曲水」は、王羲之の書法、蘭亭序のほか、奈良時代から平安時代にかけて行われた雅やかな曲水宴のイメージも内包するものといえよう。山雪は蘭亭曲水図を中国の正統の中で扱いつつも、図様や構成を変更することで新たな視覚効果や意味づけを可能とする部分を見極め、受容者の平安貴族文化への憧れや異国への憧れに応えたのではないだろうか。山雪は多くの「憧れ」を昇華するために、「憧れ」のフレームとして「南蛮屏風」の構図やモチーフを随心院本に引用したのである。

最後に潁川美術館本の作風を検討することで、<山雪筆・丈山賛の蘭亭曲水図>が存在したことを論じ、東本願寺下絵、随心院本、潁川美術館本の順で作られ、次第に享受層の広がりを得たことを述べる。

山雪の蘭亭曲水図を総観することにより、随心院本は万暦本という将来本を咀嚼し、自らのみならず享受者の持つ多くの「憧れ」を昇華させようと創意工夫を凝らしている様子が明らかになった。そして、潁川美術館本の検討を通して、随心院本が山雪の蘭亭曲水図の「模すべき型」つまり山雪の蘭亭曲水図の「到達点」として見なされていたと考えられると結論付けたい。